日記「少数意見」

－外国映画編－

JUN

2001年11月5日(月)　ノイズ

前から見たかった作品でやっと見つけたので昨日見た。ローズマリーの赤ちゃんと似たストーリーの作品で十分楽しめた。これからネタばれなので注意。

いずれの作品も最後に赤ちゃんを母親が受け入れることになるが、この部分のインパクトはローズマリーの方が強い。ノイズでは母親が地球外生物にのっとられてしまうが、ローズマリーでは母親は子供が悪魔であることを承知の上で受け入れる。

男としては、どこまで行ってもわかったと言いきれないテーマではある。母にとっては父親が誰であっても子供の遺伝子の半分は自分なのだ。それ以上に赤ちゃんが自分の一部になっているという感覚の方が大きいのかもしれない。

2001年11月14日(水)　食事

今日の朝日新聞の朝刊に面白い記事があった。秋田の小学５年生のクラスで鶏を飼育した後カレーにして食べると言う授業が企画されたが、保護者から反対の声があがり中止したとのこと。そこで「バベットの晩餐会」と言うデンマークの映画を思い出した。

フランス革命の後、デンマークの小さな漁村に逃れてきたパリの有名料理店の女シェフが、雇い主に感謝の意を表すために自費で晩餐会を開催する。彼女は最高の食材を集めるがその中に生きた海がめ一匹とうずら約２０羽がいた。かわいいなと思って見ていたら、次に登場したときはスープとパイになっていた。日本映画だったら、少なくとも生きてる姿は出さないな、と思い文化の違いを感じた。反対に日本の活け造りとか踊り食いとかは欧米から見れば残酷の極みだろう。

私にしても、ウサギを飼うようになってからはフランス料理でウサギの肉を食べられなくなった。でも鳩や鹿の肉は食べるので勝手なものだ。

2001年12月3日(月)　ハリー・ポッター

今年劇場で見た映画のワースト。

初日新宿ミラノ座で４：３０分の回。４０分ほど並んで入ったが最後まで前の２列は空いていた。

原作を途中まで読んでいたので（最近我慢がなくなったので途中で投げ出すケースが多い）、映画は原作に忠実に作っていると思った。しかし、あまりのテンポの遅さに睡魔に襲われるが、これから面白くなると信じて見つづける。一向に面白くならないが、これは私が「千と千尋」に肩入れしていてライバル視されている作品に過度に批判的になっているのではないかと思い、無心に見ようと努める。ますますつまらなくなり、時計を見る。まだ１時間もある。隣の人がため息をつき、子供が退屈して歩き回る。これほどＥＮＤマークがうれしかった映画は久しぶりだ。

なにが悪かったかというと、まず物語をそのまま映画にすればいいと錯覚していたこと。それでいい映画が出来るのであれば、シナリオライターも監督もいらない。２時間３０分あまりの作品だが、１時間縮めれば多少よくなるかも。

原作についても言えるが、エリート意識が鼻持ちならない。魔法使いは普通の人間（モグル）より優れていて、その魔法使いのエリートを教育する学校（英国のパブリックスクールのようなもの？）の話で、ハリーはその中でも血統正しい超エリートだ。善と悪が完全に色分けされていて、善が圧勝する。悪はなぜ悪なのか説明されず、成敗されるだけの存在として描かれている。今のご時世によく合っているとも言える。英米でヒットするのはその意味では分かる。

2001年12月17日(月)　マーシャル・ロー

多分公開当時の映画評がよくなかったので見なかったのだろう。公開時の日本の状況からすると絵空事としか思えなかったのも無理はない。ニューヨークにおけるイスラム原理主義者による爆弾テロの話だが、現実はそれを越えてしまった。以下ネタバレあり。

世界貿易センターがそびえるニューヨークと２５人死者を出したバス自爆テロをニューヨーク始まって以来の大事件と報じるテレビのニュースは大昔の話のように思える。しかし、映画の伝えようとするメッセージは今でも新鮮だ。

テロの原因がイスラムの一派を途中まで支援しながら、気が変わって見捨て、見殺しにしたアメリカにあるとする見方は公平だ。最後の場面でデンゼル・ワシントン率いるFBIがアラブ人を拷問死させた罪で戒厳令司令官である将軍（ブルース・ウィリス）の逮捕に向かう。ここでデンゼル・ワシントンは、国のために仕方がなかったという将軍に対して、アメリカが守るべきは永年にわたって築き上げた制度であると言って対決する。

このセリフを今日「オサマ・ビンラディンの有罪は完全に証明された」と言っているアメリカ大統領に聞かせてやりたい。

2002年1月19日(土)　スターリングラード他

ネタバレあり。

「スターリングラード」はジャン＝ジャック・アノー監督作品にしてはボケたものだった。アメリカ、イギリス、ドイツ等の合作だが印象としては典型的なハリウッド映画。ソ連兵もドイツ兵も英語を話し、それだけでうそっぽくなる。ストーリーは二人の狙撃手の戦いに三角関係がからみ最後はご都合主義のハッピーエンド。一昔前の西部劇にあるようなお話でスターリングラードに舞台をとる必要はなかった。史実に基づいているそうだが、第二次世界大戦で狙撃手がそれほど重要な役割を演じたこと自体信じ難い。スターリングラードの特殊性だったのだろうか。それだったらその背景が描けていないように思う。

この映画だけの問題ではないが、狙撃を扱った映画には必ず照準器でねらいを定める場面がある。そこで獲物は望遠レンズに捉えられ、十字の印しの真中にきてそこで引き金が引かれる。しかし、昔ちょっとエアーライフルをやった経験からすると的はレンズの中で上下左右に動き回り、決して静止しない。これは人間が銃を構えている以上銃が固定されないためで、優秀な狙撃手はその動きを最小限にして命中させるのだと思う。映画では的は静止しておりあれでは誰にでも命中させられるようにみえる。

「スパイゲーム」は荒唐無稽な話だった。最後に米軍が中国の刑務所に捕らえられているブラピを救い出すが、現実にあんなことをしたら米中間の全面戦争になる。最近のアメリカ映画には脳天気なものが多いが心配である。

「ムーランルージュ」は楽しい作品だった。映像がきれいで音楽もよかった。でも私がニコール。キッドマンだったらあんな頼りない作家ではなく金持ちの男爵のほうを選ぶのにと思った。

「アメリ」はギャグについていけなかった。たけしの「HANABI」についても同様に感じたが、無理に笑いを取ろうという姿勢にしらけてしまう。

「サテリコン」を久しぶりに見た。フェリーニの１９６９年の作品で傑作。ローマの文化が繁栄の極に達した頃の物語。美しい男が沢山出てきて、ホモ映画のようにもみえる。でも多分本当の

ホモはあのような一般受けするような美青年は好まないだろうから違うか。三島由起夫はこの映画をみたのだろうか。

2002年3月1日(金)　地獄の黙示録・特別完全版他

前回公開時から見ていなかったので内容はほとんど覚えておらず新しい映画のように楽しめた。やはりスゴイ作品で、とくに冒頭のワルキューレの騎行をバックにヘリ部隊がベトコンを爆撃する場面は比肩するものがない。追加されたフランス人のプランテーションの場面はちょっと長いと思ったが、コッポッラの思想が披瀝されていて面白かった。見ていて思ったのだが、この場面に出演した２０人あまりの役者は今どこで何をしているのだろう。死んでしまった人もいるだろう。この特別版で復活したからまだよかったけど、映画にはカットはつきもので、永久に消されてしまう場面は沢山あるのだろう。

そこで思い出したのが「戦場のメリークリスマス」のことだ。私はこの映画のラッシュを大嶋監督と一緒にみたことがある。坂本龍一の音楽が入る前のものだ。ラッシュにあって劇場公開版にない場面がある。それは、トム・コンティが登場する場面で、彼が日本軍攻撃前夜のシンガポールで美女と恋に落ち一夜を過ごすというロマンチックなものだった。この美女はニュージーランドで一番人気のある女優だということだったが、消されてしまった。ビデオにもなかったからもう二度と見られないだろう。この女優は家族や友人になんと説明したのだろう。お金はもらえたのだろうから別に気にしなかったのだろうか。

「地獄の黙示録」を見てもうひとつ考えたことは、ベトナムで戦ったアメリカ兵は多くが私と同年配で彼らはいまのアメリカの指導層になっているということだ。あの戦争の意義はともかく、あの映画に描かれたような苛酷な状況を生き抜いてきた連中と平和な日本で安穏な生活をしてきた我々はとても対等に戦えないなということ。アメリカだけではなく世界の主な国は過去５０年間になんらか戦争を経験している。要するに日本だけが無菌室で育てられてきたのだ。

話は変わるが、「市民ケーン」を何回目かに見た。もちろん映画史の上位にランクされる作品だが、今回はオーソン・ウェルズやジョセフ・コットンの老け役が気になった。自分が歳をとったからかもしれないが、あんなにからだの動きがよくないよな、などと思った。まあ、オーソン・ウェルズがこの時２６才だったことがすごいのだが。

2002年3月12日(火)　アモーレス・ペロス

はっきり言って後味の悪い映画だった。

失敗作という意味ではなく、むしろ傑作だと思った。しかし、見終わって映画というものは何のためにあるのだろうと考えてしまった。もっとも、こうやって書いていること自体この映画が私に何らかの影響を与えたことの証左なのだろう。

以下、ネタバレあり。

ほとんど接点のない三つの人生の物語だ。必ずしも順番に描かれているわけではないが、一つ目はCMスターの話、二つ目は兄嫁に恋した弟の話、そして三つ目は殺し屋になった革命家の話。

私にはCMスターの話が一番残酷に思えた。最初に彼女の栄光が描かれ、第２話の主人公（全く関係のない）の交通事故にまきこまれ重傷を負い、CMを下ろされ、やがて片足まで失い、自分の巨大なポスターが以前かかっていたビルの壁面が窓から見えるアパートに戻ってくる。でも、彼女にはボーイフレンドもいるし、愛犬もいるのだから他の二話の主人公に比べればまだ幸せかもしれない。決して全てを失ったわけではないのだから、彼女が生きる意欲を取り戻していくストーリーにだってできたはずだ。でもカメラは「広告を求める」という表示があるビルの壁面を無情に写し出す。

これが人生なんだろうと思った。誰が元気づけようが片足は戻ってこず、栄光は過去の夢だ。人生というのは大切なものを一つ一つ失っていく過程なのかもしれない。そんなことを考えた。

2002年4月23日(火)　ブラックホーク・ダウン

近代戦ともゲリラ戦とも違う。道一杯に広がってソマリアの民兵（市民や野次馬もいただろう）が銃撃を恐れる風もなく押し寄せてくる。「エイリアン２」でリプリーら精鋭部隊が立てこもる基地に押し寄せるエイリアンの大群。「スターシップ・トルーパーズ」で雲霞のごとく視野を埋め尽くす巨大な昆虫兵士の群れ。「ブラックホーク・ダウン」の敵はこれらと同様に人間として描かれていない。

立派な英語を話す将軍や兵器商と襲撃する民兵とはあたかも違う生物のようで、後者の思想は語られない。米兵はテレビゲームのように群集に銃弾を撃ち込み、また無数のスナイパーから狙撃される。

この映画には米軍側の視点しかないという評が多い。だが、戦争をリアルに描くのはこの方法し

かないのではないか。敵を人間だと思ったら殺される。相手側の理由を考えたら攻撃は出来ない。ひたすら多くの敵を殺し、味方の死に涙し、復讐を誓う。

結論から言えば、私はこの映画が好きだ。素直で偽善がない（最後の自己弁護的な哲学は不要）。殺すことの快感が伝わってくる。

ここでカチンときた人に考えてほしい。戦争が「快」でなければなぜ人類は有史以来絶えることなく戦争を続けてきたのだろう。戦争の理由はいくらでもあった。富、領土にはじまって、民族、宗教、イデオロギーからテロ撲滅まで。ソマリアの米軍はジェノサイドを阻止するという名目で１０００人のソマリア人を殺した。

この映画は図らずも戦争を正当化する大義名分の裏に「殺しの本能」があることを教えてくれる。人類は「戦争をする種」なのだ。

2002年4月27日(土)　友へチング

韓国最大のヒット作ということで期待していたが、がっかりした。

青春ものとヤクザ映画が合体したような作品で、後半は日本の一昔前のヤクザ映画に似ている。しかし、ヤクザ映画に必要な大事な要素が欠けているように思った。

日本のヤクザ映画は（色々バリエーションはあるが）義理と人情の相克を描く。「義理と人情を秤にかけりゃ、義理の重たい男の世界」と高倉健は歌うが（東映の昭和残侠伝シリーズの主題歌）必ずしも義理が勝つわけではない。傑作「博打打ち・いのち札」では、鶴田浩二は女をとって組に敢然と反逆する。最後の大立ち回りの場面、鶴田は瀕死の女を抱きかかえて血の海の中を賭場の中央の祭壇に向かい、神酒の壷を日本刀で打ち砕く。

この場面が感動的なのは、ヤクザ組織の中で生きてきた男にとって組に反抗することが自殺に等しいことが見ている側にも分かっているからだ。そのために映画は任侠道を説明しなければならない。それが宗教のように組員の生き方、死に方の細部までも規律していること。ひとつの会社を辞めて別な会社に勤めるような安易な話ではないこと。細部がどれだけ確かに描かれているかによってヤクザ映画のよし悪しが決まる。組織の序列、儀式、言葉使い、食事の作法まで。これらに忠実だった男が、組を敵に回し任侠道を捨てることがどれほど大変なことかが分かってはじめて男の女に対する愛の重さ、深さが分かるのだ。

チングは幼なじみの友情を丁寧に描いている。小学校、高校のエピソードが語られ、やがて２人

の男は別な組の幹部になっていく。そして、親友である２人は殺しあうことになる。これは先ほどの義理人情のパターンでいくと、組への忠誠と親友との友情の相克の話になる。ここで不満なのは義理が描けていないことだ。組は単なる利益集団のようだし、そんな組のために親友を殺すとすれば、そもそもたいした友情ではなかったのではないか。

2002年5月11日(土)　鬼が来た！

ネタバレあり。

映画評論家の佐藤忠雄氏はこの映画が「日本軍が中国の小さな村の村民たちをだまして虐殺する」話であるように解釈している（キネマ旬報２００２年４月下旬号）。これは全くの誤解であり、そんな話であれば凡百の反戦映画と異ならない。この作品は、日本軍の兵士を欠陥もあるが魅力もある等身大の人間として描いている。とくに虐殺を命令する陸軍の隊長（澤田謙也）は不思議な魅力をもつ人物だ。虐殺は、ナチスドイツのように理性的かつ計画的に行われるわけではなく、ハンニバル・レクターのように我々の理解できない衝動に基づき行われるわけでもない。この映画は、普通の人間が持っている殺意が突然発現し燎原の火のように全部隊に広がり全てを焼き尽くす様を克明に描写している。

日本軍兵士花屋小三郎は捕らえられ、小さな村の農民マーに預けられた。村人たちは花屋を殺すことも出来ず半年間世話をする。花屋はやがてマーたちの善意に感謝するようになり、自分の部隊につれていってもらえれば荷車２台分の穀物を与えると約束した。花屋の部隊の隊長はこの勝手な約束に激怒するが、日本軍は約束を守ると言い、荷車６台分の穀物をもって村に赴く。村人総出の歓迎会は放歌高吟の宴となり、隊長、村長らは競って歌を唄う。戦場でも人間は理解しあえるというハッピーエンドになりかけたとき、突然事態は暗転する。村人たちが陰謀をめぐらせているのではないかという疑いを捨てきれない隊長と酒の勢いでなれなれしく隊長に絡む一人の村人。それを見ていた花屋は突然その村人を襲う。あとは雪崩を打ったように大虐殺が始まる。

和気藹々とした宴を殺戮の巷に変えたものは何だったのか。この不条理を必然として描いたのは監督（マーとして出演）チアン・ウェンの才能だろう。「ブラックホーク・ダウン」が人間でないものに対する殺意を描いた戦争映画の傑作だとすれば、「鬼が来た！」は親しさのすぐ隣にある殺意を描いた作品であると言える。たしかに、戦争という異常な状況があのような結末をもたらした原因ではあるが、殺意は戦争とは関係なく人間の本質的なものなのだ。

人間はみな殺意というウィルスを体内に持っていて、それが何かのきっかけで発病する。発病すれば理性でのコントロールはきかなくなる。むしろ理性はそれを正当化する方向で知恵をめぐ

らす。花屋の暴走を見ていた隊長は、その瞬間次の凶行を阻止するという選択肢があった。しかし彼はまがりなりにも皇軍の兵士である花屋の行為を否定するより、それを正当化する道を選ぶ。すなわち、自分の脳裏にあった村人たちが敵であるという可能性を蓋然性に変え、あたかも自分が最初から虐殺を企んでいたかのように振舞うのである。それによって自分の論理的一貫性が保たれ、部隊に対する威厳も保てる。この決定に後ろめたさがあるという事実は、むしろ行動の激しさを招来する。自分が後戻りできないことを確認するために殺し続ける。

この映画がこわいのは、戦争を舞台にしながら我々の本質を捉えているからだ。人間はだれでも状況さえ整えば殺人鬼になる。鬼は我々のなかにいる。

2002年6月6日(木)　ユリョン（幽霊）

１９９９年製作の韓国映画。ネタバレあり。

ユリョンは韓国が極秘に建造した核ミサイルを搭載した原子力潜水艦である。ユリョンは日本の潜水艦と接触事故を起こしたためその存在が日本とアメリカに知れ、両国の圧力により自爆させられることになる。航海の目的を察知した副艦長は艦長を殺害し艦をのっとる。日本海で遭遇した日本の潜水艦二隻を撃沈し、１０発の核ミサイルを日本の１０大都市に向け発射しようとする。これをヒーローのイ・チャンソクが阻止するのだが、アメリカ映画などと違って考えさせられる。

なぜ日本を攻撃するのかは、特に理由が示されず、唐突な感じがしたが、最期の場面で納得した。自爆装置が作動し、回復不能な損害を被った潜水艦の中で、副艦長とイ・チャンソクが対峙する。イは「核で歴史は変えられない。待っているのは報復だけだ」と言い、「まだ準備が出来ていない」と続ける。その直後、日本の潜水艦から魚雷が発射されたことが告げられる。副艦長は言う。

「魚雷に負けたのではない。強くなることを恐れた我々自身に責任がある。強くならなければ踏みにじられて生きるしかない。つい最近まで、我々の歴史はあらゆる屈辱に耐えてきた」

「まだ終わっていないのだ。一日で歴史は変わるか？いつまで屈辱の歴史を生きろと？」

「傲慢なアメリカ野郎や日本野郎に五千年の歴史は渡さない。”幽霊”は我々自身で、我々の運命（ハン）だ」

ここは感動的だ。多少韓国の歴史を知っている人間にとっては、日本に対する復讐が民族の意志

であることが分かる。この映画を観ていた韓国の人々はせめて映画の中だけでも日本が核の火に焼き尽くされるところを見たかっただろう。しかし核ミサイルのボタンは押されず、ユリョンは海の藻屑と消える。

私がこの映画から学んだことは、日本は遠からず核武装せざるを得ないだろうということだ。韓国、北朝鮮、中国等に対する罪は謝ってすむものではなく、謝るべきものでもないだろう。副艦長が言うように、強くなることを恐れることは罪なのだ。歴史の屈辱は報復でのみ癒され、報復を防ぐのは強さだけなのだ。イ・チャンソクは決して日本の非武装中立論者のような無責任な平和主義者ではなく、現実主義者だ。彼は多分副艦長と心情的には共通のものを持っている。ただ現状認識が違うのだ。まだ報復のために機は熟していない。今やれば報復されるだけだ。

韓国、北朝鮮が核武装したとき日本に出来ることは何か？彼らの核をなるべく使いにくくすることだ。イ・チャンソクのような冷静な現実主義者が過激な考えをもつ人間に対して、日本に核攻撃を仕掛ければ核の報復がくる、祖国のためにならない、といえるような環境を作ってあげるのだ。

福田官房長官の最近の発言はそのための地ならしかなとも思う。日本人の核アレルギーというのは、病的で何かのきっかけで軍国主義に転じる。その日は近い。

2002年8月19日(月)　トータル・フィアーズ

米国ボルティモアで起きた原爆テロを機に米ロ間の全面核戦争が迫る。CIAの情報分析官ジャック・ライアンはこれがネオナチの犯行であることを察知し、戦争を阻止するために廃墟となったボルティモアを駆け回る。

核を使ったテロの映画では、たいてい核爆発は事前に阻止される。シュワちゃんの映画でフロリダ沖の島で爆発するというのがあったが、大都会が破壊されるのは初めてではないか。爆風で車両が吹き飛ぶシーンなど迫力があった。出来れば、「アキラ」のように高層ビル街が崩壊する映像が見たかった。

８月１５日の朝日新聞の夕刊に品田雄吉氏の映画評が載っていた。氏はロシアとの開戦を米国高官が議論するシーンがリアルだと言うが、それに続けて次のように述べている。

「ただ原爆描写は普通の爆弾テロとさほど変わらず、これがアメリカの原爆に対する一般的認識だとすれば、まことに腹立たしい」

ビル街が破壊されるところは予算の都合で撮れなかったのだろうが、他の描写からボルティモアの大半が消滅したことはわかり、その破壊力が普通の爆弾と違うことは明らかだ。では品田氏は何が違っているべきだと考えているのか。たぶん放射能による被害のことだろう。しかし放射能汚染は爆発直後に判明するものではなく、ライアンが核戦争阻止のために動く間は爆発による直接の被害しか映画は描けない。放射能の被害については、テロに関与した人間が被曝によって死に行く様を描写しており無関心なわけではない。それでも品田氏は「まことに腹立たしい」と言う。これは、アメリカ人は原爆については分からない、被爆国である日本人にしか分からない、という思い上がりではないか。

さらに品田氏は次のように言う。

「それにしてもアメリカは、どうしてこれほど戦いたがるのだろう」

この映画はアメリカが一方的に核テロを受けたという話であり、別にアメリカが「戦いたがる」物語ではない。品田氏はこのような場合に攻撃された国はどうすればいいというのか。核の使用はいけませんと国際際世論に訴えるのか。

映画は大統領と高官が核ミサイルのボタンを押すまでのシミュレーションを行っている場面から始まる。日本でも小泉首相は同じようなことをしているのだろうか。たとえば、北朝鮮との関係が緊迫する中で福岡市が原爆で消滅したら日本はどのように対応するのだろう。自然災害と違って守るだけでなく攻める必要があるから判断がより困難である。アメリカが好戦的だと言う前にわが国の備えにつき考えるべきではないか。

2002年10月7日(月)　拉致とランボー

「ランボー・怒りの脱出」を久しぶりに観た。

１９８５年、ベトナム戦争が終わって久しいのにベトナムにはまだ多くの米兵捕虜がいるという設定。捕虜の家族や世論に押されて米国政府は捕虜の調査に着手する。選ばれたのは前作で大暴れし採石場で強制労働させられているランボーだ。

ランボーは捕虜の存否を確認するだけという命令に背いて、捕虜1名を救出して集合場所に向かった。しかし、ランボーを脱出させるはずだったヘリは捕虜を見て引き返す。捕虜はいてはならなかったのだ。

この作戦は捕虜の不存在を確認するためのものだったが、手違いでランボーが向かった収容所には数日前から捕虜が戻っていた。米国政府に裏切られたランボーは鬼神のごとくたった一人の戦争を闘い抜く。

この作品では二つの立場が相克する。ベトナムとの再度の対決を避けるため捕虜の存在を否定しようとする作戦本部と米国のために戦った同志を救出しようとするランボー。ランボーは、無事捕虜を救出したあとで国を憎んでいるかと聞かれたのに対して、I can die for it と言い、さらに、

We want our country to love us as much as we love it. That's what I want.

と続ける。

拉致問題が起きてからこの作品をもう一度観たいと思っていた。記憶が変容していたのか最後のランボーの演説はもっと長かったように思う。自分たちが命をかけたアメリカの価値に言及したように思ったが、それは今度観たDVDにはなかった。

政治は四捨五入だから、この作品のように切り捨てられる人間は必ずいるだろう。それが長い目で見て国の利益になるということもあるだろう。しかし、そのような我慢が続くとやがて国民はランボーのような鬼神を欲するようになる。

小泉首相は国交正常化を優先するためにある我慢を国民に強いた。それが半世紀余眠っていた休火山に火をつけることになるのかもしれない。

2002年11月11日(月)　チェンジング・レーン

車の接触事故が原因で若手弁護士（ベン・アフレック）とアルコール依存症の男（サミュエル・L・ジャクソン）が対立し、争う話。結局二人は最後に仲直りし、大団円となるのだが、途中では互いの憎悪は増幅し、大きな悲劇に突き進むかのようにみえる。

この作品の面白いところは、二人の主人公をいずれも小さな悪者として描いているところである。主人公が二人いる場合、その関係は一応、善と善、善と悪、そして悪と悪に大別できる。悪と悪との対決で面白い作品にするためには、それぞれを人間的な魅力をもった悪者とするか、又は美しいまでに凄みのある悪にするかのいずれかであろう。しかし、この作品の二人はいずれも卑劣な小物だ。おかれた立場は違っても、弱さゆえに悪を行うという共通点を持っている。

物語は息苦しく、罠にはまった獣がもがきながら更に深い傷を負っていくような展開になる。だからハッピーエンドの結末は不自然で、現実的でない。もっとも他の終わり方があるかというと、二人が刺し違えるような破滅的なラストにしてもカタルシスのない陰惨なものにしかならないだろう。

ひるがえって考えると、この作品のテーマは我々普通の人間がみな持っている弱さと、それがある状況に直面したときに生み出す悪なのだ。ちょうど誰もが持っているガン細胞がある刺激によって突然増殖を始めるように。

個人的な感想かもしれないが、この作品は勇気とは何であるかを反面教師的に教えてくれているように思える。いわゆるヒーローものでは、普通の人間が自らの立場を省みずに他人のために献身的な行動をとる。それは、他人からみれば勿論のこと、本人としても覚悟さえできれば肯定できることであり、その意味では案外簡単なのかもしれない。これに反して、自分が重大な失敗をしたときに、そしてその失敗を隠すことが出きるかもしれないときに、それを告白することはとても勇気がいるのではないか。その決断は、いわゆる英雄的な行動と違って、高揚した精神状態でなされるものではない。決断は失意と絶望と自己嫌悪の中で下されなければならない。人はそのような時、自分の中の悪魔のささやきに耳を傾けることになるのだろう。ちなみに、この映画の弁護士は、事故現場に重要書類を置き忘れたことをシニアパートナーに正直に告げなかったことから事態を深刻にしていった。

今日多くのエリートたちが、自らの失態とその後の隠蔽工作の罪を問われているが、その心理はかようなものであったのか。

2002年12月17日(火)　マイノリティ・リポート

プリコグと呼ばれる３人の超能力者により殺人事件が予知され、それを犯罪予防局が事前に阻止する。このシステムが実験されているワシントンDCでは６年間殺人事件がおきていないという。

フィリップ・ｋ・ディック原作の映画には「ブレードランナー」や「トータルリコール」のような傑作があるが、この作品にはあまり感心しなかった。タイムパラドックスものにはどうしてもウソっぽさがあり、「バックトゥザフューチャー」のような気楽な話だったら楽しめるが、この作品はシリアスなヒューマンドラマを意図しているようなので、無理がある。

考えてみよう。プリコグが殺人を予知するというが、それが阻止されるなら結局殺人はなかったことになる。プリコグは存在しない未来を予知したことになり、前提から成り立たない。

プリコグは「殺人」ではなく「殺意」を察知して、その延長線上にある蓋然性としての殺人をイメージしたと考えることはできる。しかし、殺意は必ず殺人に帰結するものではない。常識で考えてみても、計画された殺人はさまざまな理由で遂行されないことがあるだろう。それは犯罪予防局の介入があった場合のみ未遂に終わるわけではない。プリコグは犯罪予防局が阻止しなければ遂行されるだろう犯罪のみを予知するというのだろうか？

さらに意地悪く考えてみよう。犯罪予防局が阻止した犯罪の加害者（本当はまだなにもしていないのだが）にはある刑罰が課せられる。では、たまたま人通りがあったから殺人を断念した人は罰せられなくてもいいのだろうか。この問題を突き詰めていくと刑法の基本問題に行きつき、現行の刑法が矛盾に満ちたものだということが分かってくる。その話はまたの機会を見てすることにして、タイムパラドックスの話にもどる。

私は決定論を信じているので、そもそも変えられる未来があるとは思わない。私がこの原稿を書くことも、あなたが今これを読んでいることも、すべてビッグバンの時に決定されていたことで、だれも変えられない。全宇宙のある時点における全ての粒子の位置と速度が分かれば、その次の瞬間の全ての粒子の状態が分かる。これを続けていけば宇宙の未来が確定的に分かるのだ。

このニュートン力学に基づく決定論が量子論（不確定性原理）によってどのような影響を受けるのか、私にとって長いこと疑問だった。最近読んだ本によると、どうやら量子論は人間レベルの未来予測には影響がないようだ。もし影響するとしたら明日の待ち合わせも約束できなくなる。

さてこの決定論が私の生き方にどのような変化を与えているかというと、あまり変わりはない。テレビの星占いで悪い運勢出ると、言われたとおり気をつけるし、未来が決まっているからといって努力しないわけではない。考え方としては、いい未来が決まっていると信じてそのために必要な努力をするというところか。

2003年2月10日(月)　レッド・ドラゴン

「羊たちの沈黙」と「ハンニバル」に先立つ物語。

それなりに面白かったが、致命的な欠点もある。先ずハンニバル・レクターの登場場面がほとんど刑務所の中ということ。これは原作がそうだから仕方がないのかもしれないが、前２作を見ていない人には、ハンニバルはうるさいジジイくらいにしか見えないだろう。

次に殺人鬼ダラハイドの正体がすぐバレてしまうこと。これもダメとは言いきれないが、最悪な

のはダラハイドがあまりにもデリケートでひ弱なこと。ダラハイドは幼少期の虐待がトラウマになって、ウィリアム・ブレイクが描いた「大いなる赤き竜と日をまとう女」（竜は生まれてくる子供を食おうと待っているのだそうだ）の　red　dragon　がとりつき殺人鬼になったとされる。彼は過去のトラウマに苦しめられ、ドラゴンからも逃れようとするが果たせず殺人を繰り返す。

小説はこのトラウマについて詳しく書いているようだが、映画ではこれが邪魔になる。映画は物事を深く考えるのに適さないメディアで、自分のペースで時間をかけて楽しめる小説とは違う。映画の観客は単純でスッキリした感動を味わおうとしているから、殺人鬼に同情するようになっては困る。とくに最後の場面では、主人公がダラハイドに過去の傷をえぐるような言葉を投げつけ、これが決め手になるので、後味が悪い。

私が脚本化であれば、トラウマには言及せず、レッド・ドラゴンとダラハイドの関係のみを取り上げる。レッド・ドラゴンに支配される存在でも悪くはないが、レッド・ドラゴンを超えて自ら神になろうとする男にしたら面白いだろう。自分が神でであることを証明するために殺人が必要だとするのだ。映画もその方向に進むのかと思わせるセリフがあって期待したが、結局殺人依存症の病人の話になってしまった。

実在した神になろうとした殺人鬼のなかで一番すごいのは麻原彰晃だろう。彼は世界史的にみてもトップクラスではないか。彼は今でも狂気を貫いており、敗れたわけではない。ひょっとすると麻原彰晃の物語はまだ終わっていないのかもしれない。彼に比べればダラハイドはもとよりハンニバルでさえ小物でしかない。

2003年2月24日(月)　アレックス

レイプの後から前へと時間を遡っていく。未来は決定されていると書いている本の話や予知夢が運命が変えられないことを示し（映画の原題は「IRREVERSIBLE」）、最期の画面に「時はすべてを破壊する」というフランス語が表示される。

映画自体はさして傑作とも思えず、やたらカメラを回す撮影は気分が悪くなった。もっとも私はモニカ・ベルッチが目当てなので満足した。

モニカ・ベルッチをはじめて見たのは１９９５年のフランス、イタリア、スペイン合作の映画「アパートメント」で彼女はロマーヌ・ボーランジェと共演していた。この映画はたまたま近くのTSUTAYAでめぼしい作品を観尽してしまったので、サスペンスの棚の「あ」から観ていこうと思って手に取ったものだった。あまりの美形に感動して他の出演作を探したが、本職はモデル

なのでコッポラの「ドラキュラ」に脇役で出ているくらいだった。

その後「マレーナ」に主演して日本でもメジャーになった。

今回のモニカはやはり美しかったが、惜しげもなくさらされる肢体は２０代のそれではなかった。「時はすべてを破壊する」という言葉は残酷な真理だ。

2003年2月25日(火)　ロッキーとペタジーニ

今「ロッキー」のシリーズをDVDで観かえしている。１９７６年の「ロッキー」から１９９０年の「ロッキー５」まで５作品あるが、私は１９８２年の「ロッキー３」でいやになり、その後の作品は観ていなかった。

「ロッキー３」は、世界ヘビー級チャンピオンの座を１０回防衛し、銅像まで立ったロッキー（シルベスター・スタローン）が最強の挑戦者に敗れ、その戦いの直後にコーチのミッキーが死ぬ。失意のロッキーを前世界チャンピオンのアポロ・クリードが激励し、再起戦に向けて二人でトレーニングを始める。私が前に見ていやだったのは、ロッキーの愛妻エイドリアンが息子をフィラデルフィアの豪邸に残しサンフランシスコでのトレーニングについてくるところだ。汗臭い汚いジムでも、プールでも、海辺でも、どこへでもエイドリアンがべったりとついてくる。それを見てほとんど生理的といえる嫌悪を感じた。

２０年ぶりに「ロッキー３」を観て、ほとんど筋は忘れていたが嫌いな場面は記憶していた通りだった。やはり今回も不快だった。

そこでペタジーニの話になる。スポーツ紙によると巨人のキャンプにはペタジーニのオルガ夫人がついてきてべたべたしているとのこと。サンデーモーニングというTBSの番組があるが、その中に大澤（親分）、張本の両氏がスポーツネタに「喝」をいれるコーナーがある。ペタジーニとオルガ夫人については二人とも異口同音に「喝！」で、男の神聖な仕事場へ女房を連れてきてベタベタするなということだった。

これで終わってはオヤジのタワゴトになってしまうので考えてみた。

神聖な仕事場とのことだが、キャンプの練習を地元のきれいどころや追っかけのギャルが見にくることには大澤、張本両氏もまんざらでもないのでは。日本映画でも、スポ根ものはいざ知らず、サラリーマンものだったら必ず主人公を励ます若い女子社員が出てくるはずだ。結局日本男子

は仕事場を神聖と考えているわけではなく、女房がくるのがいやなだけなのだ。

さらに極論すれば、これは動物のオスとメスの戦いの結末が二つのかたちをとるのではないか。つまり、男は自分のDNAを広くばらまきたがるが、それには女房がじゃまになる。女は、育児期間の長い人類という種のメスの立場から、子供が成長するまでの餌運びと用心棒としての夫が他のメスに関心を持つことを阻止しようとする。

ロッキー・ペタジーニと大澤・張本の違いが文化人類学の問題なのかよく分からないが、私が後者のグループに属しているのは確かだ。今の日本の若者はどう思うのだろう。

2003年3月22日(土)　００７/ダイ・アナザー・デイ

「００７」シリーズの第２０作目とのことで、昔のなつかしい作品へのオマージュに満ちた楽しい映画だった。

ハル・ベリーが海から上がってくるところは「００７は殺しの番号」のウルスラ・アンドレスだし、「００７/ゴールドフィンガー」のショーン・コネリーとハロルド坂田の格闘、ハイテク装備のアストン・マーチン、日本を舞台にした「００７は二度死ぬ」の阿蘇山の基地などを思い出した。

第1作の「００７は殺しの番号」が日本で公開されたのは１９６３年のことだが、私はその前から００７シリーズを読んでいた。中学生のころミステリーにはまって、クロフツの「樽」とかの古典からダシェール・ハメットの「マルタの鷹」などのハードボイルドまで、主に洋ものを幅広く読んでいた。

「００７」の映画は多分１４、５本観ていると思うが定かではない。一般的にスパイものはソ連という敵がいなくなってからつまらなくなった。今回の北朝鮮はソ連に比べれば小物だが、不可解でなにをやるか分からないという危険性が悪役の条件を満たしている。

映画の先見性からすると、北朝鮮との戦争は近いか？

2003年9月8日(月)　HERO　英雄

きれい過ぎるのがわずらわしく感じるようになる映画だった。映画はストーリー、映像、音楽の

三つの要素がバランスを保つことが大切だが、この作品は映像、特に色彩が際立っていて、最初はそれに目を奪われるがやがて過剰な音楽のようにうるさくなる。

ストーリーがもっとしっかりしていれば色彩にあれほど押されなかっただろう。三人の刺客が秦王を狙う話だが、その内二人が秦の三千人の衛兵を正攻法で撃破するというエピソードがある。超能力者でもなく単に剣の達人という設定なのでこれを信じろというのは無理だ。またこのような作戦が可能ならなぜ三人が犠牲になって無名（ジェット・リー）に暗殺の使命を託するとういような話になるのだ。四人でかかればよほど成功の確率は高くなるではないか。無名があのような作戦を取らない限り暗殺は不可能だとする納得のいく説明がないので、秦王と無名のあの大げさな会見場面が生きてこない。無名の十歩必殺の技を披露する（結局見せなかったが）舞台として無理に作られた場面としか考えられない。

砂塵、風の中で舞う旗印、矢ぶすまなど黒澤映画を思わせるところが多かった。とくに秦王の城から長い階段を降り退去する無名とそれに道を開ける衛兵の構図は、「乱」で狂った秀虎が炎上する三の城から出てくる場面とそっくりだ。

私はジェット・リーのファンだが、ワイヤーアクションでは彼のよさは出ない。ワイヤーアクションは凡庸な肉体をも超人に見せてしまい、ジェット・リーのような本物の出る幕はない。

いろいろ文句はつけたが、印象に残る場面も多々あり、決して駄作ではない。次作ではもう少し脚本に金と時間をかけたらいいと思う。

2003年11月4日(火)　キル・ビル

先週の土曜日の映画サービスデイに観たが前から四列目で目が回った。といっても十分面白く、もう一度もう少し離れた席でゆっくり楽しみたいと思った。

さて興奮がさめて考えると何かしっくり行かない。整理がつかないものが残る映画だ。

キネマ旬報の映画評を見ると二人が「気恥ずかしい」と言っていた。その気持ちは良く分かる。なにか自分の恥ずかしいところを誉められたような変な気分になる。日本の古典芸能、映画でいえば小津や黒澤なら誉められても文句はないが、ヤクザ映画、アニメ、演歌に深作欣二となると本当に誇れる文化なのか自信がなくなってくる。

知日派の外国人が日本を善意で誤解し変な日本人を描く映画は良くあるが、「キル・ビル」は普

通の日本人より日本のサブカルチャーについてはずっとよく勉強しているマニアックな天才が作った作品なので、おかしな所があってもそれは意図してやったのだと思わざるを得ない。

とにかく不思議な気分にさせる映画で、外国人はどう見ているのだろう、とか自分がこれを外国で観たらどうだろう、などいろいろと考えてしまう。

2003年12月10日(水)　マトリックス　レボリューションズ
この映画の中に「風の谷のナウシカ」とそっくりな場面があった。他にも気づいた人がいるかとネットの検索（マトリックスとナウシカで）をしたら、いたいた大勢いた。中には映画が終ってからもナウシカの音楽が頭の中をグルグル回っていたという人までいた。どの場面かは敢えて書かない。というかメンドウなんで。

ナウシカの他ガンダムやドラゴンボールとの類似を指摘する人もいて、２/３は日本のアニメのパクリだという意見もあった。私はマトリックスや日本アニメの専門家ではないので論じる資格はないが、著作権については一応プロなので考えてみた。

著作権侵害でマトリックスの製作会社であるワーナーブラザーズを訴えられないか。

日本では映像同士の著作権侵害に関する判例が少なく、どこで線が引かれるかはっきりしない。たとえば、作品の主題、ストーリーの展開、登場人物の設定、主要なエピソードなどを全てパクれば著作権侵害は明らかだ。典型的なものとしては黒澤明の「用心棒」を真似した「荒野の用心棒」。今年の初めに話題になった某テレビ局の大河ドラマもそうかな。

今回の「マトリックス　レボリューションズ」が「風の谷のナウシカ」から取って来たとみんなが問題にしているシーンは多分３分ほどのもので他にストーリーとか登場人物とかが似ているわけではない。（もっともオームみたいなキカイが出てきたが。）でも多くの人が観終わった後あれはナウシカだと思い、他の人と話す。実は私も劇場から出てすぐに友人にナウシカとそっくりな場面があったとメールした。

何が著作権侵害になり何がならないかの一般的な判断基準を作るのは難しい。とくに映像の場合は一瞬の画が全体を染め上げることがあるので長さは問題でない。結局最後は観客の印象で判断するしかないのではないか。

たとえば今回のマトリックスの最後のネオとスミスの豪雨の中の決闘は「七人の侍」の豪雨の中の野武士との合戦に似ている。でも、この程度なら観客はニヤリとするくらいだろう。次に、ネオとスミスの空中での格闘はドラゴンボールで何回も見た気がする（たとえば悟空とベジータ）

。この場合も観客の反応は好意的だろう。でもナウシカの名場面が突然出てくると「エッ！ウッソー！」とかなり否定的になりうる。

ナウシカのあの場面は独創的で、感動的で、作品全体を象徴するものだ。つまりあの場面だけで「風の谷のナウシカ」を観たことのある人は一瞬の内に作品を貫く思想を感じあのテーマ曲が頭の中で奏でられるのだ。従って、私は「マトリックス　レボリューションズ」は宮崎駿の著作権を侵害していると思う。

2003年12月29日(月)　ラスト・サムライ

アメリカ人に時代劇が撮れるわけがないという先入観をもって観はじめた。初めのうちは日本人がインディアンのように描かれるのを不快に感じた。

やがてトム・クルーズ演ずるオールグレンが日本にのめり込んでいき面白くなってきた。渡辺謙が知性と野性を兼ね備えた勝元を好演していた。

後半、勝元を討つために大砲やギャトリングガンで武装した政府軍の大部隊が押し寄せる。そのときギリシャのテルモピレーの戦いが話題に上る。紀元前４８０年ペルシャの大軍がギリシャを攻撃した際スパルタ戦士２００人がテルモピレーの天険でくいとめたという話だ。

最後の合戦の前に勝元がオールグレンに尋ねる。「それで、ギリシャの戦いの結末はどうなったのか？」

「全員戦死したよ」とオールグレンは答え、二人は顔を見合わせてニヤリと笑う。ここで涙がでて止まらなくなる。

二人は「玉砕」を確認したのだ。従来のアメリカの思想は「生還の可能性のない作戦は悪だ」というものではなかったか。そんなセリフを何かの映画で聞いた記憶がある（「パールハーバー」だったか）。

観ているときには気づかなかったが、この映画はまるごと三島由紀夫だと思った。三島は昭和４３年の「反革命宣言」で次のように述べている。

「われわれは、護るべき日本の文化・歴史・伝統の保護者であり、最終の代表者であり、且つその精華であることを以って任ずる」

「自分自らを歴史の化身とし、歴史の精華をここに具現し、伝統の美的形式を体現し、自らを最後の者とした行動原理こそ、神風特攻隊の行動原理であり、特攻隊員は「後につづく者あるを信ず」という遺書をのこした」

「有効性は問題ではない」

これは正に勝元の行動原理ではないか。侍の文化を護るという行為がそれ自体護られるべき文化の精華になるのである。

さらに、勝元のモデルは西郷隆盛だという話があるが、勝元の乱は三島が「奔馬」の中で詳しく物語った神風連の乱と酷似している。神風連の乱は明治９年の廃刀令に反発した熊本の志士が起こしたもので、かれらは火器を使わず太刀、槍、薙刀のみで１０倍の人数の討伐軍に立ち向かった。

思うに西洋から見れば三島由紀夫こそが　the last samurai ではないか。

前にも書いたように三島思想は現在のイスラムの自爆テロにつながっている。この映画の勝元は、武士の文化の最も純粋なものを命をかけて護ろうとしており、これは正に原理主義の思想である。そして三島は日本を代表する原理主義者である。

日本では封印されている三島思想はアメリカの原理主義にも影響を与えているのだろうか。

2004年1月17日(土)　ミスティック・リバー

クリント・イーストウッドの監督作品で彼の最高傑作とも言われはじめた映画である。

１１才のジミー、ショーン、デイブが路上でホッケーをして遊んでいる。そこを通りかかった２人の中年男がデイブを車に乗せて連れ去る。彼は４日後に逃げるが、人生を変えてしまうような体験をする。そして２５年後、３人はある殺人事件を機に再会し、あの日の出来事が蘇る。

我々はデイブと同じように「あの事件さえなかったら」、「あの時違う行動を取っていたら」など自分の過去に if を求めたがる。過去の１つのコマが違っていたら今の自分はこんなではなかったはずだ。多くの場合、この回想は悔恨を伴う。

しかし、本当にそうだろうか。デイブではなくジミーかショーンが車に乗ったという過去はあり

えたのだろうか。この映画はその疑問には答えない。

この映画は一見２５年前の事件にこだわっているように見えるが、本当はそんなこだわりは無意味だといいたいのではないか。あの事件がなかったとしても、デイブは同じような人間になっていたのではないか。あの事件がなかったとしても別な事件が起き同様にデイブを支配したのではないか。ギリシャ悲劇のようにどのように逃げても運命はデイブを捉えたのではないか。

そして終章で運命はジミーをも捉える。錯誤により彼は取り返しのつかないことをしてしまう。彼は被害者でありながら心ならずも加害者になり、チェスのチェックメイトのように怒りによる行動もままならない窮地に追いこまれる。しかし、妻の言葉（それは悪魔の助言かもしれないが）によりジミーは復活する。彼は運命をまるごと肯定してしまったのだ。全てはなるようになったのだ。他に可能性はなかった。

映画ははなやかなパレードを見るジミーの家族、ショーンの家族そしてパレードの中の息子を見守るデイブの妻を映して終る。

ニーチェの永劫回帰を思った。

2004年5月20日(木)　キル・ビル　Vol.2

復讐と愛をからめるのはやはり無理だったのではないか。

前作で説明不足だった復讐の動機が明かされると思っていた。確かに Vol.2 は饒舌に何かを伝えようとしている。「総長賭博」並の情と憎悪の相克と言った評論家がいたが、それは違う。ヤクザ映画の傑作「総長賭博」は義理と人情の相克を描いたもので、それが傑作になったのは人情に従って生きることを困難にする義理という規範があったからだ。愛するものを殺すという不条理はこのような強い力が存在しなければ成立しない。

Vol.２のラスト近く、ザ・ブライドとビルが話し合うところで、これで二人は和解し娘と３人の幸せな生活を選び lived happily ever after となるのかと思った。むしろその方が自然だった。

復讐劇はその動機に観客が共感できてはじめて成功する。昔の東映のヤクザ映画ががまん劇と言われたのは、主人公が敵のいやがらせ、迫害に耐えに耐えて、最後に反撃したからだった。反撃のエネルギーをためることによってより強烈なカタルシスが得られる。

タランティーノはこのパターンをふまずに Vol.1 では反撃からストレートに入った。それが是認で

きるかは Vol.2 にかかっていたのだが、全体を通してみて復讐劇は失敗だった。ザ・ブライドの動機は私怨でしかなかった。彼女は殺されたフィアンセさえ愛していなかったようだ。復讐は献身とあいまって崇高な行為になる。

この映画の夥しい殺戮はタランティーノの個人的な趣味のためにあったということか。

2004年5月24日(月)　ロスト・イン・トランスレーション

CF撮影のため東京に来た元有名スター、ボブ（ビル・マーレイ）と夫の仕事についてきたシャーロット（スカーレット・ジョハンセン）は同じパークハイアット東京に泊まったことから不思議の街東京での数日間を共にし、互いに淡い恋心を抱く。

渋谷のシネマライズで土曜日の１７：１５の回を観たが満席で立ち見が出た。観終わったときはあまり感心しなかったが、今は結構面白かったと思っている。

「ローマの休日」の東京版のようで、「ローマの休日」ほどドラマチックでないので（アカデミー賞を取ったが）脚本だけをみればつまらない作品かもしれない。脚本には描けなくて映画にあるものは東京の映像でそれは面白い。歌舞伎町の夜景、渋谷のスクランブル交差点、ゲームセンター、パチンコ屋と定番の東京ではあるが。いずこも夥しい人、喧騒、色彩に充ち「ブレードランナー」の未来都市のようである。もっとも私にとってこれらの光景はめずらしいものではなく、わざわざ映画で見るほどのものではない。

しかし、ボブやシャーロットの視点で見ると世界は一変する。東京は「混沌」という言葉に形を与えたらこうなるだろうという都市なのだ。それは都市自体が生命を持っているかのごとく自在に発展・変身し、人が作るものではないから人の手では止められず、どこまでも（多くのアニメに描かれているように破滅するまで？）変化していくのではないか。

この映画に描かれた東京の住民もみな少し変である。誰もがマトモな英語を話さないのはいいとして、やたらテンションが高く、エネルギッシュでゴーマンである。一昔前のあいまいな笑いでしか自己表現できなかった民族とは異なる人々である。

このような描き方を侮蔑的と感じる日本人がいるようだが、それは違う。ソフィア・コッポラはボブやシャーロットの倦怠の対極としてデフォルメされた東京をもってきたのだ。これは我々がエルビス・プレスリーの猥雑とエネルギーに圧倒された時代を彷彿させる。そうなのだ。この映画は世界のクールの中心が東京であることを宣言しているのだ。

Lost in Translation の　translation　は言語の翻訳だけを意味しているのではない。それは文化の解釈・理解を含み、ボブとシャーロットは異文化（それもクールな）の圧倒的な迫力に当惑してるのだ。

2004年7月17日(土)　シルミド　SILMIDO

冷戦下、韓国で死刑囚など３１人の無法者が集められ、シルミドという孤島で苛酷な軍事訓練を施される。その目的は、金日成の暗殺だった。

しかし、韓国は北との宥和に方向を転じ、彼ら特殊部隊は邪魔者になり、抹殺の命が下される。それを知った男たちは、国と対決することを決意する。

最初の訓練のあたりはアメリカ映画にもあるようなもので、退屈だったが、後半盛り上がる。全体として上出来の作品だと思ったが何かが足りない。

男達は国に裏切られたが、では彼らはそもそも何を期待していたのか。祖国統一というスローガンは叫ばれるが、彼らはそのような政治目的に命をかけていたわけではなく、求めていたのは成功した場合の無罪放免と金と名誉だったようだ。そこには大義はなかった。

類似の設定の映画に「ランボー　怒りの脱出」（そのストーリーについては2002年10月7日の日記参照）がある。「シルミド」の特殊部隊は「ランボー」の捕虜（POW）にあたり、国と対決する場面ではランボー自身に重なる。

ランボーは自らが裏切られたことのみに怒っているのではなく、アメリカの正義を信じてベトナムで戦い犠牲になった多くの兵士のために怒っている。国が掲げた大義の為に献身した者を裏切る行為をランボーは許せない。

「シルミド」の部隊は傭兵に似ていて、彼らの多くは世俗的な報償（死んでも名が残るといった無形なものも含む）を期待していたようである。そこには献身（名前も栄誉も残らなくても自分を捧げる）の対象になる価値はなく、リスクは大きいが成功すれば代償も大きいギャンブルがあった。

「シルミド」における国家の裏切りは詐欺ではあるかも知れないが、あくまで世俗的な犯罪であり、精神界における罪の色彩は薄い。その結果、裏切りに対する怒りも賃金を払われなかった傭兵の怒りに似て、次元の低いものになってしまう。

2005年2月28日(月)　ボーン・スプレマシー

「ボーン・アイデンティティー」の続編で、前回のヒロイン、マリーが冒頭で殺されてしまう。

意表をついた展開だ。

マリーが殺されることにより、ジェイソン・ボーン（マット・デイモン）の行動は復讐になる。それと自分の中で封印された過去の解明が絡む。物語は前回以上に複雑になり面白い。これまでになかったヒーローである。最後の場面は感動的で、このようなアクションものにはめずらしく目頭が熱くなる。

マット・デイモンは全く笑わず、００７シリーズにあるようなユーモアもない。まるで高倉健のようである。それが彼にはあっているようで、深い傷を負った人間の苦悩がにじみ出ている。

敵は、CIAで、昔観た「コンドル」という作品を思い出した。これはロバート・レッドフォード主演で、彼がCIAの情報収集担当のエージェントに扮しCIA内部の組織と闘うという話だった。アメリカに留学していたときに観たので字幕はなく半分ぐらいしか理解できなかった。その時は映画を観終わっても何をめぐる争いだったのか分からないままだった。

2005年3月16日(水)　現実と虚構

昨日書いた話を基に、なぜ虚構が現実より感動的になりうるかについて考えてみよう。

「プロジェクトＸ」が描写した現実は、善意に満ちた教師が不良高校生を涙の力で更正させ、ラグビーの強豪校を育て上げたという美談だ。私のようなひねくれた者は、素直に感動できず、表面の話はいいから本当の所はどうなんだ、と問いたくなる。その教師の本当に欲しかったのは何か、金か、名誉か。仮にそうでなくて、その教師が実際に私心のない善意にあふれた人だったとしても、それがなんだと思ってしまう。私にとっては、そのような完璧な人間は気持ちが悪く、友達にはなりたくない。屈折していない人間には興味がもてない。

「富豪刑事」の場合はどうか。鎌倉警部がラグビー部のコーチになった理由は明確だ。コーチ襲撃事件の犯人を探すためだ。美和子が高校を作ったのも、不良高校生たちの更正が目的ではなく連中を四六時中監視するためだった。でも、ラグビー部の練習が始まると明かな変化が生じる。鎌倉は昔を思い出したかのように情熱的に指導し始め、美和子理事長もそれを夜遅くまで見守り、大きなヤカンを持って走り回る。不良たちも鎌倉たちの熱意に応える。この変化をもたらしたのは、個々人の力というより、スポーツの神様なのだろう。とまれかくまれ、一つの仕掛として作られた高校ラグビー部は命を吹き込まれ、犯罪捜査とは別な、独自の目的に向って動き出す。

次の場面、焼畑学院高校は焼畑カップの決勝に残っている。犯人がラグビー部員の中にいないことが明らかになって、鎌倉は部員たちを前にして叫ぶ「いいか、俺はこれからお前たちに殴ら

れる」「お前たちは腐った大人になるな！」と。キャプテンの小栗は何のことか状況を把握できず、いわれるままに鎌倉を殴る。このエピソードは「スクールウォーズ」のパロディーらしいが、「富豪刑事」では独自の意味を持つ。鎌倉は殴られることにより部員たちと一体になれたのだ。もっとも、この出来事を影から見ていた部下の刑事鶴岡は「そんな問題じゃないが・・・」とつぶやく。殴られたぐらいで、部員達を騙していた事実がなくなるわけではない、ということだ。情に流されがちなストーリーを客観的に見る眼があるのがこの作者の厳しいところだ。

試合は小栗のペナルティーゴールで焼畑学院の逆転勝利となり、部員たちは歓喜の中で走り寄り、鎌倉を胴上げする。それをうれしそうに見る美和子。このドラマはここで現実とは違う感動を生み出した。それは鎌倉や美和子が作った偽りの世界が、ラグビー部員の汗と涙によって浄化され、輝かしい勝利の瞬間をみなが共有することの感動だ。鎌倉の胴上げは、単に勝利の喜びを表現するものではなく、警察と不良少年という対立する異質な存在が一つになったことをあらわし、その重さは私のようなひねくれた者をも感動させる。

逆説だが、虚構にはウソがないのだ。書かれた脚本には、書かれたことしか載っていない。私は現実に涙することはほとんどないが、虚構には安心して涙を流す。虚構は裏切らない。

2005年4月2日(土)　アビエイター

「市民ケーン」と似ていると思った。しかし、かの名作にははるかに及ばない。

「市民ケーン」は、新聞王ランドルフ・ハーストが死ぬときにつぶやいた”rose　bud”（薔薇のつぼみ）という言葉ではじまり、そのキーワードで彼の人生を解明しようとする。

「アビエイター」も”quarantine”（伝染病予防のための隔離）という言葉がキーワードになる。この言葉は、ハワード・ヒューズの強迫神経症（過度の潔癖症）の代名詞のように何回も映画の中でヒューズ役のデカプリオが口にする。

「市民ケーン」では、最後に”rose　bud”の意味が明かされ、それまでに語られたハーストの人生に別な光を当てる。人生にとって何が一番大切なのかを考えさせる結末だ。

これに比べると「アビエイター」のキーワードは作品のテーマと結びつかない。強迫神経症はヒューズの個人的な問題でそれは観客が共有できるものではない。華麗な実業家が病んだ一面を持っていたという事実を描くだけで、観客からすれば強者にも弱点があったという興味本意な関心しか抱けない。

デカプリオの演技はヒューズの弱い面を出したときは良かったが、強い実業家には全く見えなかった。また「市民ケーン」と比較して悪いけど、製作時監督主演のオーソン・ウェルズは２５才。老け役まで見事に演じていた。天才だからしょうがないが、いやになってしまう。

2005年6月6日(月)　ミリオンダラー・ベイビー

ネタバレあり。

「ロッキー」ばりのサクセスストーリーかと思って半分過ぎたところで、突然奈落の底に突き落とされる。マギー（ヒラリー・スワンク）は、世界タイトルに挑戦する試合でラウンドの終了後の反則攻撃で倒され、コーナーからフランキー（クリント・イーストウッド）が差し入れた椅子に頭を打って首の骨を折る。首から下が麻痺したマギーは、ハリウッド映画的な奇跡のカンバックはなく、人工呼吸器なしでは生きられなくなる。気丈なマギーも、壊死した左足を切断され、気落ちする。マギーは、事故の前にフランキーに話したことのある昔飼っていた犬の話をする。その犬は下半身不随だったが、前足だけで家の中を走り回っていた。マギーの父親は当時具合が悪く、先が長くないことを悟っていた。ある日、父親はスコップを持って犬を連れて車で森に向った。犬は久しぶりの外出を喜んでいた。父親は土に汚れたスコップを持って帰ってきたが、犬はいなかった。マギーは父親が、犬にしてくれたことを自分にもしてくれとフランキーに哀願するが、フランキーは拒否する。

マギーは舌を噛んで死のうとするが、失血死寸前で助けられる。しかし、また同じ事を繰り返し、鎮静剤を打たれる。マギーはフランキーに訴えていた。自分は貴方のおかげで世界タイトル戦まで経験した。何もなかった人生ならこれからの人生も耐えられるかもしれないが、自分にはあの興奮と自分の名前を呼ぶ観客の声が忘れられない。このままこのように生きていればあの感激が失われてしまう。

フランキーは毎週礼拝に通っていた神父に言う。マギーは挑戦したんだ（she gave it a shot）、だからもういいのではないか。自分の思うように生きたのだから。神父はこれまでフランキーがどのような罪を犯してきたかは知らないが、今度しようとしていることはそれと比較できないほど重大なものだと言う。

フランキーは夜、病院に忍び込み呼吸器をはずし、致死量のアドレナリンを注射し、行方不明になる。フランキーのカバンの中にはもう一本注射器が入っていた。

（上記会話は、一回しか見ていないので正確ではない。）

最初は、尊厳死の話で、前半の華やかな物語は、後半との明暗を際立たせるためにあるのかと思った。しかし、しばらく考えて、she gave it a shotというフレーズが引っかかった。shotという言葉はその前にも何回か出てきた。フランキーの主義は、タイトルへのshot（挑戦）は未熟なうちには与えられない、というものだ。その機を待ちすぎたために他のマネージャーに取られてしまった有望なボクサーもいた。フランキーにとってshotとは人生で何度もあることではないのだ。

マギーは、ただの不幸な人としては描かれていない。マギーは栄光の座に手の届く所にいた。短かったが、皆がマギーに注目し賞賛し声援を送った日々があった。マギーは負け犬ではなく、選ばれた者だった。マギーは、自分の人生の輝かしい部分を汚すことなく消えていきたかったのだ。マギーを造り上げたフランキーは、神の教えに逆らって、マギーに死を与えた。これは一つの神話なのだ。

2005年7月23日(土)　SWEP３と宇宙戦争

「Star Wars エピソード３」と「宇宙戦争」に共通するのは暗さである。ある新聞評のように９・１１以降の米国の不安が表現されているとも言えるが、もっと深刻で、人類に対する絶望感がにじみ出ているように思えた。

もう一つの共通点は、愛がテーマになっていることで（これ自体は普通だが）、その愛が悪へとつながっていくのである。

SWEP３では、アナキンはパドメを救おうとしてダークサイドに堕ち、ダース・ベイダーになる。「宇宙戦争」では父親役のトム・クルーズは娘を護ろうと不審な男を殺す。一番身近な者に対する愛が悪を引き寄せる。これは、人類の将来を暗示している。

ロンドンのテロリスト達も家族思いの好青年（少年）だったようである。富や領土を奪い合うこれまでの戦争は、まだ自分とは関係ないといえた。自分にはそんな欲はないから、そのような戦争に積極的に関わることはないだろうと。でも、愛が理由だったらわからない。愛するものを奪われるとなったら戦うだろう、殺すだろう。最も善良な人も（又はそのような人こそ）行動に移るだろう。これからは、そんな時代なのだ。

2006年1月24日(火)　キング・コング

３時間８分の長尺が短く感じられた。日本映画は大作になればなるほど、間延びして、不要なセリフや過剰な演技が目に付くが、彼我の違いは何だろう。ピーター・ジャクソンは、これでも入れたかった場面をいくつも切ったそうだが、それは観ていて分かる。不必要に長いのと、刈り込まれて長いのは全く違う。

この作品は、３３年版のリメイクだが、私が３３年版を観たのがいつだか定かでない。７６年版は劇場で観たが、その時３３年版と比べていたから、その前であることは確かだ。ひょっとしたら、子供の頃ニューヨークで観たのかもしれない。

７６年版でがっかりしたのは、時代が現代になっていて、最後の場面がエンパイアステートビルでなくてワールドトレードセンターになって、コングを攻撃するのが複葉機ではなく武装ヘリコプターになっていたことだった。こんどの作品はオリジナルのままだ。

３０年代のニューヨークは、超高層ビルが建ち始めたころで、CGで再現されたニューヨークは美しい。私は１９５７年のニューヨークは見ているのだが、今のようなガラス張りのビルはなく、重厚な佇まいだった。

そして、最後はニューヨークを見下ろす世界一のエンパイアステートビルの頂上での決戦となる。映画史に残る名場面だ。観る前からここで泣くなと思っていたが、ピーター・ジャクソンの思い入れはすさまじく、これでもかと感動の波状攻撃をかけてくる。高倉健の斬り込み場面のようだ。

エンパイアステートビルのてっぺんから見たニューヨークの朝焼けがきれいだった。

2006年9月6日(水)　ユナイテッド９３

私は、この映画のテーマはヒロイズムかと思っていた。Let`s roll と言ってテロリストに素手で立ち向かった男たちの物語というと、アメリカ人の好きな「アラモの砦」のような英雄談を思い浮かべる。乗客の中の誰かをヒーローに描けば、人を感動させるのは簡単だ。

しかし、この映画は私の予想をいい方向で裏切っていった。描かれるのは、テロリストや乗客の外面で、その内面の葛藤や各人の背景（生い立ち、家族、思想等）は最小限に留められる。特定の人間により多くの光が当てられることはなく、みな平等に一つの悲劇に直面する。

現実というものは、本当はこういうものなのだとこの映画は我々に気づかせる。特定のヒーロー

なんていなくて、みんな他人に負けない自分の世界を持っていて、死ぬときはわずかな外面のみを見られながら消えていくのだ。

映画は、登場人物の内面に踏み込まないだけでなく、彼らが見る範囲の世界しか描かない。飛行機がWTCに突っ込むところなどニュースの映像にだっていくらでも迫力のあるものがあるのに、白黒のモニターに映し出される絵しか出さない。でも、それがかえってリアルですごい。

結末は、誰もが知るとおり、飛行機はペンシルバニアの森林に墜落し、生存者はいない。この事実を、アメリカン・スピリットの発現とみることもできるだろう。最後に、乗客の一人にそのようなセリフを言わせれば、自由と民主主義を守るために戦った英雄の物語になる。しかし、この映画はそのような安易な感動を与えてくれない。映画は、「機体が上がらない！上がらない！」という操縦桿を握った乗客の一人の悲痛な叫びで終わる。

そこにあるのは、政治的・宗教的な対立などよりもっと重いものだ。飛行機は、人間の小さな争いと一緒に地球の重力に引かれて墜落していった。ペンシルバニアの森林にその衝撃は呑み込まれ、何年か後には痕跡も残らないだろう。

この映画は、一番ホットな政治的テーマを扱いながら、私の感じたメッセージは仏教的な諦念ともいうべきものだった。諸行無常一人間の思想、主義主張、価値観そしてそれらをめぐる争いは、地球の重力の前にはなんとむなしいものなのか。

2006年12月31日(日)　硫黄島からの手紙

「父親たちの星条旗」を観て、クリント。イーストウッドが何故このようなストレートな反戦映画を作るのか不思議だった。よく出来た作品だと思ったが、いまひとつ深みがないように感じた。

「硫黄島からの手紙」を観て、二つの作品は併せて一つの大きな絵になると感じた。共通するテーマは「組織と人間」であり、「星条旗」は国家によって作られたヒーローを描き、「硫黄島」は国家に捨てられたヒーローを描く。勝者の立場から作られた「星条旗」にはカタルシスがないが、完全な敗者の側から見た「硫黄島」では最後に鬱屈とした感情が行動によって解き放たれる。やくざ映画の我慢劇のように、ひたすら抑えられた激情が爆発する。しかし、それは組織を破壊する方向には働かず、自分に与えられた任務を果たすという枠のなかではじける。

栗林や西は、アメリカに親近感を抱く合理主義者として描かれている。彼らは無謀な作戦の中で自分たちが捨て駒として扱われていることを知っている。しかし、彼らの最後の行動は「天皇陛

下万歳！」を叫んで死ぬことだった。そこには一分の迷いもなく、与えられた役目を果たす軍人の姿があった。それが哀しく美しい。

2007年1月2日(火)　硫黄島からの手紙　その２

クリントはこの映画で本当のヒーローを描きたかったのだろう。

皮肉なことに、勝者の側からは本当のヒーローは出にくい。「父親たちの星条旗」で擂鉢山に星条旗を立てた連中が偽者でなかったとしても、彼らはやはり「栄光」という毒に侵されて同じように堕落していったのではないか。彼らが言ったように、本当のヒーローは硫黄島で死んでいった者なのだ。

本当のヒーローは次のような条件の下に出現する。

ある普通の感覚を持った人（だから中村獅童演じる伊藤中尉は該当しない）が究極の選択を迫られ、苦悩の末、より利己的でない道を選び、それは死に直結する。

「ミリオンダラー・ベイビー」のフランキー（クリント）はそのような状況にあった。

「父親たちの星条旗」と「硫黄島からの手紙」の二部作は反戦映画ではなく、英雄伝である。戦争の悲惨を描こうとするならば、硫黄島戦にはいくつもその材料があった。クリントが描きたかったのは、悲惨の中の栄光だった。栄光の光は闇が暗ければ暗いほど輝きを増す。

渡辺謙は、「（自分の）この役は、クリント自身だな」とひらめく瞬間があった、と言っている（キネマ旬報No.1473）。クリントはたぶん栗林とバロン西に自分自身を写していたのだろう。だから、彼らはクリントに似て日本の軍人としては異常に背が高い。でも、クリントが一番好きだった役は西郷（二宮和也）だったに違いない。西郷は、最初から戦争に意義を認めない徴兵されたパン屋で、妻子のもとに帰ることだけを考えていた。そんな西郷が栗林の人柄に接し、感銘を受け、さらに彼の最期に立ち会ったことで変化する。栗林の遺品であるピストルを持った米兵にスコップで殴りかかる西郷は感動的だ。無感動だった西郷を動かしたのは、大義ではなく、栗林に対する敬愛の念だった。

この二部作のもうひとつのテーマは文明の衝突だ。太平洋戦争は、米国にとって西欧以外の強敵との最初の対決であり、今日まで最大の対決だった。西欧社会全体としても、近代戦としては、日本が最大の敵だった。「天皇陛下万歳」と叫ぶ日本兵と「アラーは偉大なり」と唱えるイスラ

ムテロリストは重なる。その理解不能な相手に栗林やバロン西のような人物を通して迫ろうとする試みがある。この二部作は、「自由と民主主義のアメリカ」と「皇国日本」を対等に捉え、それぞれの主義主張を超えた「美学」によって人間を評価している。どちらにも、いい奴もいれば、いやな奴もいる。殺しあう中にも、美しい人間や行為があり、敵味方共鳴する部分もある。クリントの男の美学だ。

西郷は、座標軸で言えば、日米の対決という左右の軸ではなく、上下の軸に位置する。彼は、イデオロギーに無関心な現代の若者を代表している。その彼が最後にスコップを振るうことで、東西、過去現在を融合した、壮大な物語が完結する。

2007年6月17日(日)　３００ースリーハンドレッド

３００人の精鋭のスパルタ戦士が百万のペルシャ軍を迎え撃つ。フランク・ミラーのグラフィックノベルの原作を「シン・シティ」のザック・スタイナー監督が実写映画化した。

全体としてジャパネスクが色濃く、黒澤の「七人の侍」のテーマ、シーンはうまく利用され、他にも黒澤映画からの借用は見られる。映像、色彩、音楽は劇画調で、私はなぜか白戸三平の漫画を大島渚が映画化した「忍者武芸帳」を思い出した。１９６７年の作品で、公開時に一度観ただけだが強烈な印象を残した。原作の絵を静止画像でつなげ、それに台詞と効果音が加わる。紙芝居のようだが、動かない絵がどんなアニメより迫力があり、白戸三平の荒々しい絵が今にも動き出しそうに迫ってくる。

１９６７年は面白い年で、ひょっとしたら革命が起きるかもしれないという緊迫感が空気に満ちていた。そんな中でこの作品を観られたのは幸せだった。

「３００」もアメリカの今の時代の空気を反映しているのかもしれない。イスラム文明の元であるペルシャとキリスト教文明の元であるギリシャの対決。ペルシャは異様なエイリアンとして描かれ、スパルタの戦士は正義と自由を守る者として描かれる。

しかし、描かれたスパルタ戦士は決して従来のアメリカンヒーローではない。彼らは死ぬことを承知で戦いに赴く。いや、むしろ死ぬことが目的のように見える。最後の戦いの前にスパルタ王レオダニスは傷ついた一人の戦士を使者に指名し、これまでの戦いの有様を国に帰って国民に伝えるように命ずる。１００万の敵軍に対して３００人が勇敢に闘って死んでいった物語を語り継ぐようにと言う。そして、やがて戦士たちの遺志を継いだスパルタ軍はペルシャを打ち負かす。

皮肉なことにここに描かれた思想は自爆テロの思想なのだ。そして日本の特攻の思想でもある。

2008年2月5日(火)　ブラッド・ダイヤモンド

DVDで観た。いわゆるハリウッド映画でご都合主義なストーリーには感動しないが、舞台となっているアフリカの抱えている問題には考えさせられる。

最近、「ホテル・ルワンダ」、「ナイロビの蜂」などアフリカを舞台にした映画が多い。国は違っても内戦でほとんど意味もなく人が殺されるシーンが共通する。

大量殺人という点では文明国の方が優るだろうが、そこでは様々な大義名分で人殺しの悪が隠されている。ナチスにしても、歴史的・科学的・生物学的な理由で殺人を正当化しようとした。人間的というか、やはり正面から殺人が好きだからやっているとは言えないのだろう。

アフリカの殺人にはそのような言い訳さえないように見える。ツチ族とフツ族とか、政府軍と反乱軍とか、自他の区別さえつけば殺戮が始まる。

未開人に近代兵器を与えたのが間違いだという見方もあろうが、私はむしろアフリカが真の人間の姿であって、文明社会の「平和主義」はまやかしだと思う。今半世紀以上世界大戦が起きていないのは核兵器に対する恐怖によるもので、それが一回使われればタブーはなくなり、歯止めの無い殺戮が始まるのではないか。映画の中で言われていたように、アフリカが文明化するのではなく全世界がアフリカ化するのだ。

ネアンデルタール人とクロマニョン人は一時期共存していたが、ネアンデルタール人が亡びクロマニョン人が残ったのは、後者がより攻撃的な遺伝子を持っていたからだという説がある。人類は同一種内で徹底的に殺しあう珍しい種である。

攻撃性は、今日の文明を作り上げる原動力になった競争心と表裏一体のものだ。人類は過剰な攻撃性をごまかしながら発展してきた。企業間の競争はよく戦争にたとえられる。野球やサッカーなどのスポーツも戦争を模している。それらは時に美化されるが、アフリカの現在を見ると、人間の攻撃性は、意味もなく人の腕を叩き切ったり、目玉をくり抜いたりする所までいかないと収まらないもののように思える。

2008年4月5日(土)　ノーカントリー

ネタバレあり。

本年度のアカデミー賞４部門受賞の問題作。

物語は麻薬組織同士の殺し合いの現場に遭遇したカウボーイが放置された２００万ドルを持ち去るところから始まる。それを追う麻薬組織の殺し屋。その両方を追う保安官。ここまではよくある活劇だ。でもコーエン兄弟はありふれた設定から意外な世界を描き出す。

力も知恵もあるカウボーイは殺し屋を出し抜くかと思われる。しかし、途中であっけなく殺される。壮絶だったはずの銃撃戦はカットされカウボーイの死体だけが映される。サイコキラーでもある殺し屋が無意味で不可解な殺戮を重ね、カウボーイの残された妻に迫る。

保安官はカウボーイの死後主役的立場になるが、犯罪を阻止することは出来ず、カウボーイの妻も殺される。

仕事を満足に終えた殺し屋はゆっくり自動車を走らせ青信号を確認して交差点に入る。そこに突然右から暴走車が突っ込む。左腕の骨が突き出るほどの重症を負った殺し屋はそれでも破いたシャツで手を吊っていずこへか去っていく。そこで映画は終わる。

ここには勧善懲悪はなく、ヒーローのための栄光ある死もない。殺し屋の殺戮も仕事以外に自分の哲学だか趣味だかに従った殺しもあり不可解だ。この悪魔のような殺し屋に打撃を与えるのは正義でも神でもなく、偶然現れた暴走車だ。

この映画は原作に忠実だそうだが、小説でも映画でもそこに描かれる世界は意味を持っているはずだ。それは作者の創造した世界で作者の思想を反映している。その思想は、正義は勝つであったり悪は栄えるであったり多様だが、思想を表現するためにストーリーが考えられ登場人物が設定される。ではこの作品が訴えたいことは何か。それは世界には意味が無いということではないか。

ここに描かれた世界は従来の創作の世界より現実の世界に近いのだ。現実世界では善行が報われるという保証はなく、悪が倒されるとしても倒す側が正義とは限らない。世界が正しい方向に向かっているという実感はなく。そもそも何が正しい方向か分からない。

老保安官が、No country for old men と言うがこれがオリジナルのタイトルだ。無意味な殺戮が横行する今のこの国は昔と違う。老人の住める国ではない。それは何も今のアメリカに限ったわけではない。日本の最近の理由なき殺人事件を見ていると、世界全体がそのように変わりつつあることを感じる。でもそれが狂っていると断じれば済む話ではない。むしろ不条理が世界の本質か

もしれないからだ。

もし、人間に、人生に、そして世界に意味がなければ理由なき殺人が起きるのも必然かもしれない。そのテーマで書いたのが小説のコーナーに掲載してる「あとにつづく者」で２５歳の時の作品。

2009年4月11日(土)　チェンジリング

クリント・イーストウッド監督作品にしては切れが悪いと思った。

これは true story とのことで、キネ旬によれば登場人物の言葉なども史実に則していると。扱われた事件は奇想天外で、事実の重みには圧倒される。しかし、これがフィクションだったら脚本は詰め込みすぎで焦点が絞れていない失敗作だと思う。

子供が失踪した母親の視点から描かれていて、感情移入しやすい。その反面他の人間が類型的で平凡だ。教会が善で、警察が悪という構図がどこかで変わるかと思っていたが、最後までそのままだった。

うそつきの子供と混乱している母親に翻弄される警察の視点で描いたらもっと面白いものが出来ただろう。

サイコパスの殺人犯には興味があるのでどんな人間なのか知りたかった。彼にとっての罪と神と赦しは何なのだろう。日本の犯罪史にはいない異常な怪物だ。

アンジェリーナ・ジョリーは熱演だが、美人が泣き、怒り、叫ぶ姿はあまり見たくなかった。最後の方で、毛皮の襟がついた高そうなコートを着ていたのはそぐわなかった。多分これも史実なんだろうが。

2009年7月14日(火)　グラン・トリノ

クリント・イーストウッドの監督主演作。

ウォルトは、頑固な老人で健康を害している。息子たちや孫たちとは不仲だ。一人暮らしの家の周りは白人が引っ越して出て行き、隣にはモン族の一家が越してきた。最初は不快に思ってい

たウォルトだったが、やがて一家と親しくなる。その一家の姉弟を守るためにウォルトは身を挺する。

昔の東映ヤクザ映画を思い出したが、あまり感動しなかった。

ヤクザ映画のクライマックスが感動的になるのは、ヒーローがある価値のために他の価値を捨てるからだ。それは組のために女を捨てるというように義理と人情の関係で語られることが多い。

ウォルトの場合は、最初から人生に未練はなかった。むしろ自殺願望があるとさえ思える。無意味に死ぬことも出来ないと思っていたところに絶好の死に場所が用意された。だから彼の死には崇高さがない。

もう一つ感動を妨げるのは、ウォルトがモン族の一家と関わる理由が明確でないことだ。親しみを感じるようになったエピソードはあるが、人種差別主義者のウォルトが変身するだけのものか。

ヤクザ映画の場合は、ヒーローの行動は義務の履行でもある。それは組の責任ある立場というポジションであったり、恩を受けた人に対する義理だったりする。「ごくせん」などもそのパターンを踏襲していて、やんくみが窮地に陥った生徒を救いに現れたときに言うセリフは「私はお前らを決して見捨てはしない。だって私はお前らの先生だから」。それは義務であり義理でもあるが、あたたかい感情に裏打ちされたもので「先生だから」は「母親だから」と似た響きがある。

「ごくせん」では、約束を守る、裏切らない、など信頼に基づく価値が熱く語られる。ヤクザの組とか、学校とか、緊密な人間関係が予想される社会における物語であれば、信頼が献身的な行動を引き起こすというストーリーが可能だ。「グラン・トリノ」はそれを異民族間で描こうとしたので無理があった。

2009年8月18日(火)　意志の勝利

渋谷のシアターNのレイトで観た。

レニ・リーフェンシュタール監督作品で、１９３４年のナチ党の全国大会の記録映画。

先ず、ヒトラーの映像や声をこれだけたくさん集めたものは今まで接したことがなかったので堪

能した。間違いなく２０世紀最高のスターだ。この映画自体彼のプロモーション映画のようだ。

映画は７０年を経ても迫力があり、鳥肌が立つ。CGの映像による群集場面はたくさん見たが、この映画の白黒で表されたアリのような群集にはどれもかなわない。

映画以前に党大会の演出がすごい。隊列を作った無数のナチ党員によって地表に描かれる直線で構成された図形と、その上に聳え立つカギ十字のバナー。天に突き刺さるようなサーチライトの光の束。

ヒトラーが側近二人と二つの巨大な長方形の黒い人の塊に挟まれた真っ白な道を献花のためにゆっくりと歩く。それをカメラははるか上方から延々と映していく。豆粒のような三人の姿を、近づくことをせず、映し続ける。その真ん中がヒトラーなのだが、それまで多用したクローズアップを使わず、なにかヒトラーでさえも大きな歴史の流れの中では黒い点でしかないと言っているようだった。

総じて言えば、とても危険で魅力的な作品だ。独裁者は権力が作るものではなく、民衆が作るものだということがわかる。その歓喜は麻薬的で、必ず繰り返される。

2009年12月2日(水)　イングロリアス・バスターズ

ブラピが大活躍してナチスをやっつける話だと期待するとがっかりする。

これまでの活劇の定石を意図的に外して、安易なカタルシスを避け、それでいて2時間半を飽きさせない傑作。

ブラピ軍団の話と並行してナチスに家族を殺された少女（メラニー・ロラン）の物語がある。しかし、ブラピと彼女は出会わない。映画館主になった少女とそこでヒトラー暗殺テロと企てるブラピは顔を合せない。

少女と刺し違えるナチスのヒーローは互いに憎み合っているわけではない。二人が殺しあうのは単にタイミングが悪かったからだ。

本当の主人公であるユダヤ人ハンターのナチス将校（クリストフ・ヴァルツ）はナチスを裏切り生き延びる。勧善懲悪はない。

最後の場面で、ブラピはナチス将校の額にカギ十字を刻み、上手く出来たと喜ぶ。劇場爆破によ

ってヒトラーは死んだのか。ナチス第三帝国は崩壊したのか。映画はそのような大きな歴史には興味が無いようだ。

悠久の時間の中では、第三帝国の運命と額のカギ十字の出来栄えには軽重の差はない。

映画の世界にある予定調和は現実世界には存在しない。

そのような不条理の中でも美は存在するとタランティーノは言いたいのだろう。劇場が燃えるシーンは美しかった。ナチスのカギ十字のバナーには炎がよく似合う。

2010年3月29日(月)　ハート・ロッカー

戦争は男が好きな遊びだ、という映画。戦争の麻薬的な魅力を描く。

ビグロー監督は、この映画をイラクで戦うwomen and men に捧げるとアカデミー賞受賞スピーチで言ったが、映画には女性の兵士は登場しない。

この映画には、戦争を正当化する「正義のための戦争」、「自由のための戦争」、「人民解放のための戦争」とかいう偽善的な言葉は出てこない。戦争はただ面白いのだ。

ジェームズ二等軍曹は、職人が細工物をつくるように、細心の注意をはらって爆発物を処理する。職人と違うのは、一つ一つの作業に命がかかっているところだ。

砂漠での銃撃戦は美しかった。双眼鏡でやっと見える敵と長い間対峙し、狙撃する。命中したときの喜びは狩猟に優るだろう。狩猟とは違って仲間も何人か死んだが。敵に対する同情はない。野鳥や鹿に対して同情しないと同じことだ。

ジェームズがアメリカにいたときの短いエピソードが挟まれる。玩具で遊ぶ幼い息子に、子供のころ楽しかったものが大人になるとだんだん無くなってくる、今の自分には一つしか残っていない、と語りかける。

最後の場面は、新しい部隊に配属され、防護服を着て、嬉々として仕事に臨むジェームズが映される。

女性監督が、男の世界の真実を見抜いているという皮肉。